

書 評

寺山 和雄・広畑 和志 監修

標準整形外科学 第6版

越智 光夫 (島根医科大学整形外科学教室)

「外科」が男子医学生にとって燦然と光を発していた黄金の時代は去りつつある。師から弟子に技術の一つずつ直接教えていく徒弟制度にも似た体育系の持つ匂いを好まず、また肉体的にも自信が持てないという若者が増えている。緊急手術が入ればそのまま翌日の勤務に入っていくかざるを得ず、肉体的にも確かにきつく、5時以降もプライベートの時間を確実に持てないことも好まれない原因かもしれない。「外科」の魅力、「整形外科」の魅力を学生に如何に教え、伝えるかが現在問われている。

1996年4月1日、寺山和雄・広畑和志両名誉教授監修、辻陽雄・石井清一両教授編集による『標準整形外科学』の改訂第6版が上梓された。初版発行から18年目である。この教科書が学生の整形外科学の教科書として確固たる位置を築いてきたのは精魂込めて育ててこられた執筆者の先生方のご努力の賜物である。「整形外科とは何か」という序章から始まり、骨・関節・筋・神経の整形外科基礎科学、整形外科診断学へと進むが、そこまでで約135ページが割かれている威風堂々とした教科書である。第6版では問診する医師の心得が加えられており、患者と医師の間の信頼関係にも注意を喚起している。本書の一つの大きな特徴である「主訴、主症状から想定すべ

き疾患」の表、シェーマ、カラー写真の豊富さなど、学生側に立った配慮がなされている。

学生諸君にこの本の印象を聞くと、厚すぎるため、全部読んで覚えるために利用するのではなく、ベッドサイドティーチングの際に担当となった患者の疾患を調べる参考書として利用するという。いくら現在の学生が必要とする知識が増加したと言っても、本書は minimum requirement を越えており、威圧感を与えられるのかもしれない。しかし、単に試験のためだけに作成された薄っぺらい参考書のようなものでは味わえないおもしろさが味わえる。

一つの現象の裏に潜む機序と理論付けを知ることができれば、自ずから興味も湧くし、その方面に引き込まれていく。一見無駄で不必要に思える記載の部分(後に重要であったことを悟るのであるが)も、複雑な内容を理解するには不可欠の要素である。この教科書は学生の「なぜ」に答えることができ、整形外科とは何であるのかと同時に、整形外科のおもしろさも教えてくれる。学生の興味を整形外科に向けさせることができる教科書の一つであると信じ、推薦する次第である。

(B5 頁768 9,064円(税込) 1996 医学書院刊)